

特集  
青森  
～雪と共に生きる人の知恵～

Special Features  
AOMORI  
Snow country wisdom

マタギの暮らし

Living in harmony with the snow : The matagi  
(traditional highlands of the Tohoku region)

## 雪と共に生きるマタギ

牧田 肇

MAKITA Hajime

弘前大学名誉教授/白神マタギ舎



### 1—しのび撃ち

トウホクノウサギは、冬になると真っ白になる。雪にとざされた世界での保護色だが、耳の先だけにわずかに黒い毛が残る。目も黒い。

ノウサギは夜行性で、昼間は木の根元などにできた雪穴の入り口に座って休む。上空からタカが襲ってくれば穴の奥にかけ込む。テンや人が近づけば飛び出して走って逃げる。他に戦う道具のないウサギには、こうやって身をかわす以外、敵から逃れるすべはない。

近づく敵の気配を知るために、ウサギは耳をびんと立てていることが多い。すると耳の先の黒いところが見える。目を開けていれば目も黒く見える。これを目当てに、ウサギに近づいて銃でしとめるのを、ウサギの「しのび撃ち」という。

雪が積もっているとはいえ、冬の山には木の幹や枝、ものの影など、黒いものがたくさんある。その中から、ウサギのほんの小さな耳の先や目を見つけ出すのは大変だ。ぴんと立った耳の形、頭の形をまわりの雪の中から見だし、耳の先と目の黒で確認するのだという。鍛え

上げられた観察力と注意力なしにはできない技である。いくら観察力と注意力にたけていても、やみくもに探し回るのは効率的でない。まず、足跡を見て、いそうなところをさがす。

ウサギは足の幅が体重に較べて広いから、比較的雪に沈まずに歩き回ることができる。とはいえ、一晩中餌を探して歩けば疲れてくる。歩き始めは足の指をつぼめているが、疲れてくると足の指が開いてくる。つまり足指の開いた足跡があれば、そのウサギは休もうと思っているわけである。

休む前にウサギはいま歩いてきた足跡を逆にたどって、足跡を二重につける。それから脇にびよんと跳んで別の方向に歩き、そこで休む。これは、最大の天敵であるテンを惑わすためにすると考えられ、「止め足を使う」という。足跡が二重になり、匂いもそれだけ強いから、足跡を追ってきたテンは、まさに「占め子のウサギ、すぐそこだ」と思うだろう。そこでいきなり、足跡がとぎれるから途惑ってしまう。最終的には正しい足跡を見つけられるとしても、うろろう戸惑ううちに、近くにいるウサギは

それを察知して、さっさと逃げ出せるというわけである。

テンはだまされるが、人には逆効果である。まず足跡の幅でウサギが休むムードになっていることを知り、止め足を見つければ近くにウサギが休んでいるわけだから、注意深く辺りを見回して、発見の可能性が高くなる。なにしろ人間はテンより視点が高く、視野も広い。

足跡を見つけ、解説するには、雪がしっかり積もった翌日がいい。だから、しのび撃ちは深い新雪の日に、かんじきを履いておこなう。全力で歩いて息を切らすと、それをウサギに聞きつけられるし、銃のねらいが定まらない。

だから、息が上がらない程度にゆっくり歩いてウサギをさがす。

そのゆっくりが問題である。雪は深い。銃は重い。われわれのように体力がない者が息を切らさないように歩いたら、歩ける距離、すなわちウサギに遭遇する機会はきわめて限られる。息を切らさずに広い範囲を歩くには、強い体力と歩き方の技術が必要である。

### 2—マタギ入門

いまとちがって、昔はウサギが沢山いた。山の子供たちは、まず針金の「くくり罠」でウサギを獲ることをはじめた。くくり罠は白神山地では「フクス」といい、針金の片方をウサギの頭が通るぐらいの輪にした簡単なものである。これをウサギの通り道の木などにくくりつけておくと、ウサギは輪に頭をつっこんで首が絞まってしまう。

という簡単なようだけれど、そもそもウサギの通り道がどこにあるかを判断しなければいけない。またウサギの頭の高さに輪を仕掛けなければかからない。なまかなことでウサギが獲れるものではない。子供たちはフクスを仕掛けることで、ウサギの行動に対する観察力を養い、雪山を歩く技術を身につけた。

マタギの家の子供は、小学校上級になると、父親や兄の銃を持ち出して、しのび撃ちを始めた。いまは銃の規制はきわめて厳しいが、50年も前は緩やかで、家族も別にとがめなかったという。子供が、それを通して基礎的な体力、雪中を歩く技術、観察力・注意力を養い、銃の扱いにも習熟することを知っていたのである。

ウサギを見つけたとしても、弾丸が当たるとは限らない。銃の構えの仰角と俯角、それぞれの角度によって狙う高さが違う。あいだに木などがあって邪魔をすることもあろう。散弾はウサギの真正面からあたると毛に



■写真3—ウサギの穴。この入り口で休む

よって弾かれてしまう。だから、ウサギがこっちを向いて休んでいるときには、雪玉をほうって走り出させ、横を向いたところを撃つのだという。そのような獲物の行動を見切るテクニックも親兄弟から聞き、それを現場でためして覚える。

はじめてウサギをしとめられるまでには二冬も三冬もかかる。最初の一羽が獲れるとそれはうれしく、親も褒めてくれたという。マタギは獲物を「捕る」といわずに「授かる」という。苦労の後、はじめて一羽のウサギを得たとき、この言葉は強く実感されるだろう。

TVの取材でしのび撃ちに同行したことがある。一日中歩いた末、あきらめてもう帰ろうかというときに、ようやくウサギが撃てた。皮を剥ぎ内臓の処理をしながら「神様、最後に授けてくれたんだなあ」とつぶやくのを実際に聞いた。

ウサギのしのび撃ちは銃猟の入門であり、同時に雪山での猟の技術と体力の基礎である。だから、マタギは一人前になっても、条件のいい日が来ればひとりでのしのび撃ちに出かけ、技術を磨く。

### 3—初マタギ

しのび撃ちができるようになると、カモシカ(ニホンカモシカ)の猟に連れて行かれる。カモシカは現在では特別天然記念物だが、昭和30年代までは重要な換金資源だった。肉も、毛皮も、角も販売された。

カモシカの猟は、厳冬期のもっとも雪が深いときに行なわれる。雪によってカモシカの行動が制限されるからである。1月から2月、旧暦の師走にあたることから「師走マタギ」といった。

カモシカを雪の深い沢の中に追い詰めたり、雪庇の下に追い詰めたりして捕獲した。マタギは深い雪の中を歩



■写真1—冬のブナ林。うしろの雪にサル足跡がある



■写真2—ウサギの足跡





■写真4—授かったウサギと工藤光治マタギ

くとき、先が広がって船の櫂のような形をした杖、「コナギ」を持っている。場合によっては、追い詰めたカモシカの角をコナギで払って銃を使わずに倒すこともあった。

師走マタギに連れて行かれた子供はここで団体行動を教え込まれる。マタギとしてのさまざまな作法の教育も受ける。ルール違反や失敗をすると、いきなり後ろからコナギでぽかっとやられたという。パーティの一員として行動できない者はここで振り落とされる。ただし、師走マタギは楽といえば楽である。なにしろ雪が深いから、ラッセルして進まなければならない。先頭はつらいが、後の者はゆっくり行けるのである。

カモシカ猟でよしと認められると、マタギの表芸である春グマ猟に連れて行ってもらえる。これを「初マタギ」という。つまり、カモシカ猟は師走マタギとはいうけれど、本当のマタギの猟ではないわけである。

マタギという言葉は、行為と人や集団の両用に使われる。たとえば、初マタギや師走マタギは行為を意味する。明日はマタギに行くなどともいう。それに対して、土地の名前を付けた阿仁マタギ、目屋マタギなどは集団を意味する。一方、あの人はマタギだというようにも使われる。例えば工藤マタギとか大谷マタギというように一種の敬

称としても使われる。語源は諸説あってよくわかっていない。

#### 4—春グマ猟

春季にクマを捕獲する最大の目的は、熊の胆つまり胆嚢を得るためである。冬眠中のクマはなにも食べないから、胆嚢には胆汁がいっぱいにたまっている。その肥大した胆嚢を乾燥させたものが熊の胆。代表的な漢方薬で、熊胆ともいい、内用、外用に特効的な効果を持つという。同じ目方の金の値段で取引されるといわれるが、実際はもっと高価だという。

クマが冬眠の穴から出てくる頃は、山はまだ大半が雪に覆われている。けれども日当たりのいい斜面や雪崩の落ちたあとに山菜が出るので、冬眠から醒めたクマはこれを食べる。あるいは、雪を掘って去年落ちたブナの実などを食べる。餌をとったクマは、尾根の上のキタゴヨウなど針葉樹の生えたところに行って休む。広葉樹はまだ葉を落としたままなので、遮蔽を求めて針葉樹の生えたところに行くのである。

マタギはクマが餌をとる場所、休む場所を経験的に知っているから、そこを中心に観察する。クマを発見すると、そこにそっと近づいて行って撃つ、あるいは移動中のクマであれば行く先を予想して先回りし、撃つという方法がある。単独で狩りをする一人マタギはこうするほかない。

複数の場合は、何人かがクマの向こう側に回って声や物音を立ててクマを追い、他の者はクマが来ると予想される場所で待ち伏せして撃つ。クマを追いだすことを「シシオコシ」といい、少人数で狩りをする場合、これをする人は、きわめて経験に富んだ者でなければならない。山とクマを知り尽くし、山を自在に歩いて、撃ち手のところにクマを誘導する。これができるマタギはもうきわめてわずかだろう。

現在では無線機が使えるから、一人がクマを発見した場所に残ってクマを監視しながら、撃ち手にクマの情報を伝えるという方法も取る。この場合も、残った者はクマの移動方向などを的確に撃ち手に伝え、クマが授かった場合、他の者が置いていった荷物全部を持って現場に急行しなければならない。大変苦勞の多い役割である。

春山の雪はときに凍り付いている。急斜面で滑ったらおしまいである。雪崩の危険もある。安全と危険のすれすれのところ、というよりわれわれの常識では完全に危険の部類にはいるところを、長靴に「四本爪」という簡単



■写真5—コナギ



■写真6—ウサギの解体  
昔は、解体せずに売った。いまは販売することなく、皮と内臓をとって肉だけ持って帰る。皮と内臓は雪に埋めて、テンなどが食べるに任せる。

なアイゼンをつけた程度の装備で往来し熊をおいつめ斃す。引き金を引くときは、鬼の心になるという。少しでも仏心を持ったり、ためらったりすれば失中する。相手は自分になんの害を及ぼすわけでもない。その生命を自分の生活のために奪う。それには鬼になる覚悟が必要だという。今回は自分がクマの生命を奪った。次は自分の番かもしれない。それでいいのだという。

#### 5—神様を仲立ちとして

春グマ猟は、残雪が融けて、その場所に生えるベラキ(オオカメノキ)の葉が昔の一銭銅貨の大きさになると終わる。木の葉が茂って、見通しがきかなくなるからである。

昔は、秋になって木の葉が落ちると、クマの罝猟をおこなったが、いまは禁止されている。今日では、また次の冬、雪が積もってウサギのしのび撃ちができるようになるまで、マタギは、山菜、キノコ、川の魚など、別の恵みを山から授かって暮らすのである。



■写真7—ベラキ(オオカメノキ)の芽だし



■写真8—雪解けの白神山地 暗門川上流の世界遺産地域